

1 作成の背景

経済・社会構造の変容、情報技術の発展、気候危機やパンデミックなど、世界が様々なレベルで激動し根本的な変化を遂げつつある現在、人類社会の歩みを時間軸に沿って分析し考察する歴史学的アプローチは、人文社会科学系か自然科学系かを問わず分野横断的に極めて重要である。とりわけ、グローバル化の背後で分断や対立が深刻化し、諸地域・諸国家間で緊張が激化しつつある中において、これらの危機と向き合い、その性格と背景を理解し、解決の展望を探る上で歴史的な思考が不可欠であることは論をまたない。日本学術会議は、歴史認識およびその形成の場である歴史教育をめぐって、高等学校での新設歴史関連科目の提言を発出するなど、複数の分科会・委員会で個別具体的な諸課題に取り組んでいる。本見解は、これらの取り組みと連携しつつ、現在の日本と国際社会における歴史認識をめぐる重要な論点を整理し、それらを今後の教育行政の前提として示すとともに、市民一般とともに現代における歴史的思考の意義を考える指針を提供するものである。

2 現状および問題点

グローバル化の背後で分断や対立が進む現代の世界では、歴史自体が争点化され、紛争の火種になっている。また、情報技術の急速な発展も今後の社会における知識のあり方に新たな地平を拓く可能性を持つと同時に、インターネットや SNS で大量に流通する客観的な根拠を欠く情報がデジタル・ポピュリズムと呼ばれる現象に寄与して、歴史や記憶をめぐる対立を激化させる側面を持つ。歴史教育をはじめとする歴史認識を形成するプロセスは、本来私たちが未来を展望する上で豊かな手がかりを提供するはずであるが、このプロセスが必ずしも十分に機能していない。

3 見解の内容

このような状況を克服し、歴史教育・歴史認識が社会においてその本来の役割を發揮するためには、以下の点に配慮し、社会全体での取り組みを行なうことが必要だと考えられる。

(1) 多元的で複眼的な理解の重要性

複雑かつ急速に変容する現代世界にふさわしい歴史認識を育むには多元的で複眼的な理解と対話の姿勢が求められ、特に次のような点が重要である。

- ① 自己と他者の歴史を共に学び、自らの歴史を深く学ぶと同時に、それが他者とのどのような関係性の中で形成されてきたかを知る。それによっ

て自己を相対化する視点を獲得し、極端な自国中心主義を克服する。具体的にはグローバル・ヒストリーや人類史の視点、さらに人類の歩みを自然界全体の歴史の中に位置づけて（「人新世」概念）、批判的かつ省察的な視点を獲得することである。

- ② ジェンダーをめぐる状況や人種差別などの問題に着目し、近代世界の成立や戦争・植民地支配の過程で差別や周縁化を経験してきた人々の声に耳を傾ける。
- ③ 社会の中で市民が展開するさまざまな歴史実践（史料保存活動、地域の歴史を学ぶ活動、戦争や被爆の記憶を継承する活動など）に注目する。
- ④ IT化による知のあり方の変容が歴史認識に与える影響に対処する。
- ⑤ 中学校・高等学校の課題に答え得る大学の歴史教育を検討する。

(2) 歴史研究＝歴史教育＝歴史実践という循環的構造の全過程における対話の重視

歴史認識は、一方的に注入されるものではなく、歴史研究と歴史教育と歴史実践の循環構造の中で形成され、不断に更新されるものであり、その全過程で対話という要素が重要になる。対話を基調として多元性や多様性を重んじる歴史認識が形成されれば、歴史は対立や紛争の道具とはならず、未来を切り拓く指針としての役割を發揮できる。

こうした対話に基づく歴史認識の形成のためには、国際的な歴史対話や歴史共同研究などの経験に学ぶことが必要であり、そのためには息の長い取り組みが求められる。また、その成果が歴史教育の現場に還元され、生徒が多様な意見に触れながら多元的で複眼的な歴史認識を形成するためには、教科書が重要である。日本は教科書に関して検定制度を採用しており、その経緯や性格、そして現在果たしている機能をどう評価するかをめぐっては様々な議論があるが、運用面では、近年、検定基準をめぐる制度の安定性や教育を受ける子どもの学習権などの観点から問題が指摘される状況が生じている。生徒ひいては市民が多様な視点に触れながら歴史認識を形成していく環境を保証することが求められる。

対話を基調としながら多元性と多様性を重んじる歴史認識を形成することは、社会に柔軟性と活力を与える。歴史教育・歴史認識が未来を切り拓く指針としての本来の役割を發揮することは、社会全体の発展にとって重要である。本見解は、そのための議論の活性化に寄与することをめざすものである。